

「愛語」

愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこすなり。おほよそ暴悪の言語なきなり。世俗には安否をとふ礼儀あり、仏道には珍重のことばあり、不審の孝行あり。慈念衆生猶如赤子のおもひをたくはへて、言語するは愛語なり。

徳あるはほむべし、徳なきはあはれむべし。愛語をこのむよりは、やうやく愛語を増長するなり。しかあれば、ひごろしられず、みえざる愛語も現前するなり。現在の身命の存せらんあひだ、このんで愛語すべし、世生生にも不退転ならん。怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり。おかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。おかはずして愛語をきくは、肝に銘じ魂に銘ず。しるべし、愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子とせり。愛語よく廻天のちからあることを学すべきなり、ただ能を賞するのみにあらず。

〔訳〕愛語というのは、衆生に対してまず慈愛の心をおこし、思いをかけて愛のことばをかたることである。およそ荒々しいことばは口にしないのである。世俗では安否を問うという礼儀があり、仏道には、「お大事に」へ珍重」ということばがあり、「御機嫌いかがですか」へ不審」という挨拶の作法がある。「衆生を慈しみ念ずること、あたかも赤子の如くである」ということばがあるが、その思いを内にこめて語る、それが愛語である。

徳あるものは賞むべきであり、徳なきものは憐れむべきである。愛語に気づいてそれを始めることから、次第に愛語はその人にとって成長していくのである。今日の命が続くかぎり、進んで愛語を語るべきである。そうすると、生まれかわり死にかわり、世々生々にも、愛語からけっして退転することはないであろう。怨みある敵を降伏せしめたり、あるいは官位にある人へ君子」を和解せしめたりするのは、愛語が根本となるのである。

面と向かって愛語を聞けば、自然に顔はほころび、心あたたくなる。向かわずに、愛語を聞けば、それは肝に銘じ、魂まで動かされる。よく知るがよい、愛語は、まことに天下の時勢を変えるだけ力のあることを学ぶべきである。ただ相手の能力を賞めるだけでは、愛語ではないのである。